
幻日

石鍋 盆回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻日

【Zマーク】

Z5855E

【作者名】

石鍋 盤回し

【あらすじ】

静駿の突然の言葉。私の想い。私が悪かったのかもしれない。私は普通とは違つたのかもしない。でも、私は。

「なにこれー！すつじゅくコレイ」カラオケボックスから出ると、朝日がきらきらと、朝露に薄く煙の大気を照らしあげていた。

「ねえ見て、静駿！ 握めそつだよーほらほらほらー」

愛莉はステップを数歩刻んでから、厚く張った氷にすべり盛大に転んだ。

微かにうつむいていた静駿は僅かに苦笑してから、バッグの中の絆創膏を取り出した。

「ううう、すつじゅくイタイよう」

静駿は黙つたまま手慣れた様子で、擦り剥いてしまった掌に絆創膏を貼り付ける。

慰めて欲しい、なんて思いを込めた今にも泣き出しそうな表情で、愛莉は静駿を見上げた。

しかし愛莉は痛みとは異なる理由で、柳眉を歪めなおす。

「もう、いいだろ」

片膝をついて愛莉を見下ろしていた静駿は、膝を払いすぐに立ち上がつた。そしてもう持つている玩具をプレゼントされた子供のように、はつきりと冷めた瞳で愛莉を一瞥した。

「俺たちのこと、終わりにしよう」

「え？」

「他に付き合つてる子が居るんだよ。だからもう愛莉とはこれつきりだ」

「嘘でしょ？ ねえ」

ゆっくりとその場で立ち上がり、愛莉は幽鬼のように頼りない手つきで、静駿へと手を伸ばした。静駿はそれを払いのける。

「私に悪い癖があれば直すからさ、嘘だつて言つても……」

静駿は愛莉から視線を見る。

それは雄弁に終わりを告げていた。

「そつかあ……そつか。」「めんね、私が……悪かつたんだよね」

၁၅၂

「私、ドジだし。いつも怪我とかして静駿にも迷惑かけてばつかだ
し……静駿からしたらこんな私みたいなのより素敵な人を選ぶのは
当然で……」

「それだ」

静駿は線の細い身体からはまったく想像できない、腹の底から擦り出す渋い銅鑼めく声で囁いた。

「なんで怒らないんだよ。俺

「それは……」「俺が何しても笑うて……」「なんだそ？いつも」「HーHーして」

「氣持ち悪いんだよ。せーと普通の通話でいい！」

静駿の握り締められた拳が、するりと開く。しん、と突き刺さる冬の寒さが静駿の掌を一瞬にして紅色から死人のような白色に染めた。

「もう耐えられないんだよ、お前のそういうとこ……」

愛莉は踵を返し遠ざかっていく背に呟く。

彼は振り向かなかつた。凍りついたアスファルトが、最後に打つ革靴の音を響き渡らせる。

「私、その」

愛莉はその背に伸ばしかけた手を握り、抱きしめる。あれほど輝きに満ちていた大気がするりと逃げていく。ただ、染み入る冷たさしか掴み取ることは出来なかつた。

靜駿立也の掛軸

「じゃあな」

今度こそ振り向く事無く静駿は去つていつた。
じりじりと、掌の擦り傷のみが熱く痺れていた。

全身が冷え切っていた。とくに関節は、お父さんの仕事柄、何時だつたか一緒に見に行つた人形展のその人形の、球体関節になつてしまつたみたいに鈍く軋む。

ぼんやりとしていた。

静駿を見送つてから体が勝手に動き出して、そのまままづと歩き続けていた。もう寒いなんて感覚を通り越して、身体に触れる度に音叉を弾いたみたいな痺れが全身を共鳴させる。

思い返すと、静駿が私に声をかけてきた日は私が思つていたよりも鮮やかに脳裏に蘇つた。

私はどつちかといえば、のんびりしているんだと思う。いろいろなものと私が見て、聞いて、感じて、交わるときに、穏やかな時間の流れがあつて、それを感じるのが幸せだった。

静駿は名前に静かという漢字が入つているのにどつちかといえばせわしなかつた。私をいつも連れ出すときも、あれこれ予定を詰め込んで、まるで私が政治家にでもなつてしまつて、静駿はその秘書にでもなつたみたいに次々に次の目的地はどこだ、なんて私の手を引いた。

私は、デートでいろいろなところをへとへとになるほど歩き回つて、やつと静駿が「どこかで休憩しよう」と切り出してくるのがいつも待ち遠しくつて。

デートがつまらないわけじやなくつて、そのベンチで、公園の木陰で、遊園地の広場で、ジュースとかアイスを食べたりしながらそのあわただしい時間を思い返して、静駿と話せる時間が好きだった。

静駿は休憩も時間を刻んでいて、私がアイスを食べきるのを今か今かと待つていて……食べちゃつたらすぐに立ち上がりてしまったんだけど。

今思つと、静駿が私を嫌いになつたのはそういうところかもしれない。

私は少し皆と違つた。

例えばさすがに高校生になつてからは一緒に入らなくなつたけど、お父さんとずっと一緒にお風呂に入つていたし、皆が言つみたいに反抗期つていうのがなかつた。

ユキのお父さんなんかかっこいいし、凄腕の弁護士で素敵だと思うけど、そんなユキだつて父親がウザイつていつてたし、ヒロミも口には出さないけどパパさんのこと疎ましがつていたつ。

手が冷え切つて痛い。掌の擦り傷だけが熱くて、そこ以外凍つてしまつているみたい。手を合わせて握り合わせ、その手の中に息を吹き込んだ。

零れた白が流れて消えていく。

足は勝手に家に向かつて歩いていた。

長くなだらかなカーブを描く上り坂を越えると、公園橋と呼ばれる巨大な橋にたどり着いた。小高い対岸から街へと坂になつてある公園橋に沿つて、うつむいていた視線をゆっくりと上げた。

開けた視界一杯に街並みが映る。

街全体が薄く朝霧に包まれ、太陽光を乱反射してぼんやりと輝いている。

橋の中心から伸び全体を支えるそのハープの弦は、幻想的に輝きを放つ街並みを閉じ込めて……見上げるその弦の中心、橋を地面に繋ぎとめるコンクリートの鉢の丁度真正面から、朝霧のヴォールに包まれた太陽が私を照らしている。

ジリジリと、掌が熱い。

私が悪かつたのかもしれない。

私の静駿へと想いは静駿が求めるものと違つたのかもしれない。

私は嫌気が差したのかもしれない。

けど。

私は私の通りに、太陽のように活発な静駿を包み込もうとしていた。

この朝靄のようだ。

橋が曲がる。光り輝く朝靄が私の視界をすべてプラチナ色に眩しく染めた。

「ばかあああああ……一 股……とかーせーしゅんのばかああああああああ……」

頬が熱い。体が凍り付いて押しつぶされそうで、その分自分でも驚くほど声が出た。体温と、涙と、声と一緒に、何か胸の闇えまで身体からとんでいくような気がした。

「じえ、ぜえつたいいい女になつて……なつてみせるんだからああああああ……」

浸とする早朝の静寂に、湿った声は少しばかりの余韻を残してすぐに溶けていった。

《一週間後》

「あの、ち」

一人つきりで話がしたい、と、愛莉を屋上まで呼び出しておいて、所在なさげに静駿は身体をゆすった。だいぶ汗をかいて、微かにうなり、そしてだいぶ間を空けて、口を開く。

「都合が良いとは思つ。最低な男だつて言われてもしかたないかもしない……けど」

愛莉に向けて、頭を下げた。

「わかつたんだ、愛莉じゃないとやっぱり俺、駄目なんだつて……俺みたいなのを優しく支えてくれるのは愛莉しかいらないんだつて……だから」

愛莉は視線を落として右掌を指でなぞった。この間の擦り傷の痕。うつすら赤みが差してこるけれど、もう傷口はふさがって、新しい薄皮はつるつるしている。

「静駿……」

愛莉の優しい声に静駿はゆっくりと頭を上げた。

「「」あん、もう一度と迷わないかい、また俺と…やつ直してくれないか」

真剣なまなざしを受けて、愛莉はゆっくつと慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

そして、ぱちん、なんでパンタの音が屋上から階段にこだまする。

「お幸せにね、静駿」

あっけにとられた顔の静駿をそのままに、愛莉はふわりと踵を返した。頬をなぞり、髪を遊ばせる風が温かい。随分早いけれど、春が待ち遠しく感じる。

体が軽い。

そして掌が、じつじりと熱かった。

完

(後書き)

んー、未熟ですねえ、先に反省点を挙げるなら、特に、エピローグ扱いの一週間後、へ繋げるワンクッション扱いの部分をなんとかしたかったかなあと思します。

あとは、やこじるて見られる話で絶望です。

じゅつたい、もっと凄いの書けるやつで精進してやるんだかりやあ
ああああ

とか、書いてみて後悔しつつ、終わります。

最後までお付き合っていただき、ありがとうございました～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5855e/>

幻日

2010年10月10日05時26分発行